

第4章 万物の真理

4.1 万物の真理

第2章より、「なぜ何もないのではなく何かがあるのか？」というところからスタートして、〈すべて〉、〈わたし〉、〈世界〉、等々の概念を導入し、それによって「なぜ自然法則があるのか？」「なぜ私は私なのか？」「死んだ後はどうなるのか？」、等々といった問いをここまで考察してきました。

それにより、それぞれの問いに対してそれなりの見方を提示することはできたと考えます。

ただ、今のところ〈わたし〉という主観的意識と〈世界〉という客観世界、この二つが二元論的に存在しているようにも思われます。この**両者を統合的に眺めるような見方**を提示して、初めて全てを説明できるのだと思います。

よって、第四部の目的は、これまでの内容のおさらいもかねて、**〈わたし〉と〈世界〉の位置づけをはっきりさせ、両者を統一的にとらえる見方を示すこと**、またそれによって「**万物の真理**」というものを一つ提案してみることです。

4.2 <わたし>と<世界>の統合

<わたし>と<世界>の統合を考えるにあたり、以下の簡単かつシンプルなケースを題材にして考えてみたいと思います。

目の前にリンゴがあり、それを眺める私の主観上に「リンゴ」というクオリアが生じている。

この過程は、これまでの話からどのように記述できるでしょうか。

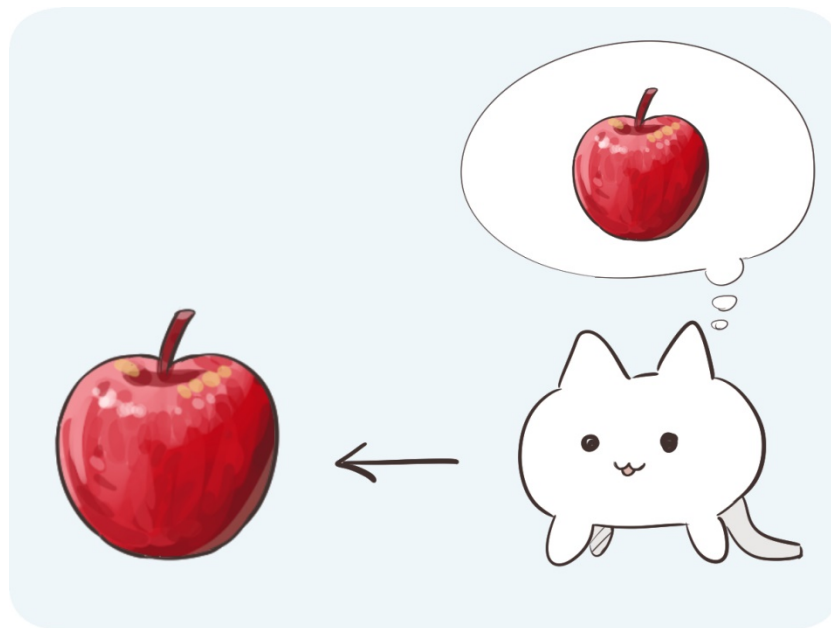


図 考えるケース

まずは常識的な見方からスタートしたいと思います。

まず、意識に上る「**対象**」であるリンゴが**客観世界**に存在している、と考えられます。そしてリンゴからある波長域の電磁波が反射され、網膜の視細胞で電気信号に変換され、クオリアをコードする特定の神経細胞群へ入力されるという一連の流れは、物理過程としてまとめて捉えることができると思います。これを「**観測過程**」と呼ぶことにします。さらにその入力が特定の神経細胞群によってパターン化され、クオリアが生じる時、<わたし>という意識に上るクオリアを「**ソフトウェア**」と捉えるなら、それを生じさせる神経細胞群は「**ハードウェア**」に対応すると考えられると思います。

以上を図にすると以下ようになります。

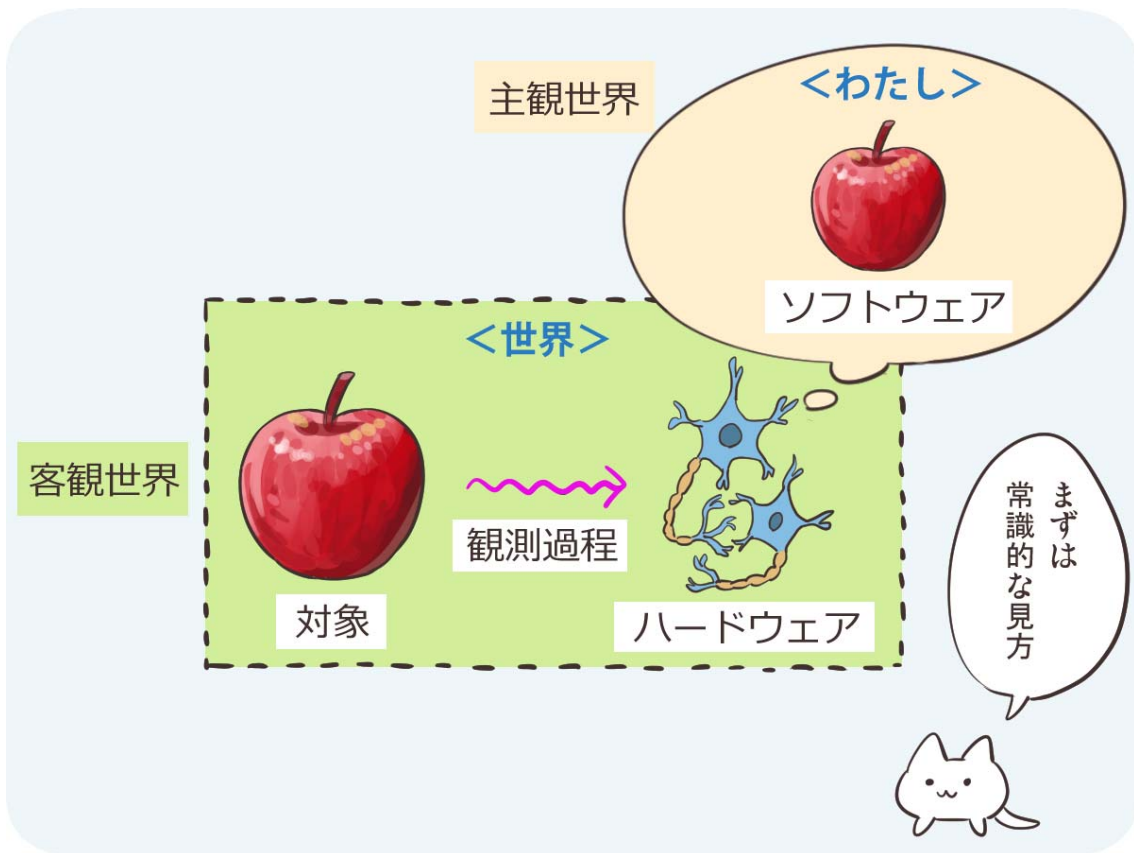


図 <わたし>と<世界>の統一 その1

この時、「対象」、「観測過程」、「ハードウェア」は客観世界としての<世界>に属し、「ソフトウェア」たるクオリアは<わたし>という主観世界に属すると考えられます。

これは主観世界としての<わたし>と、客観世界としての<世界>、この二つを二元論的に分けて考えるような見方ですが、とりあえずは常識感覚に合う見方でもあると思います。

さて、そうは言っても「リンゴ」という対象は還元すれば様々な分子、原子、等々が電磁気力で結びついているだけにすぎず、それを「リンゴ」というパターンとして粗視化して眺めるためには<わたし>という意識が必要なのでした。

そのことは視細胞や電磁波等の「観測過程」や「ハードウェア」である神経細胞群についても同様です。

そう考えると、客観世界に「**本当にある**」のは分子や原子等のミクロの構造だけであり、「リンゴ」や「神経細胞」はそれを粗視化して生じる「**見かけ上の**」ものに過ぎない、ということになると思います。

ここで、**ある情報を粗視化した際にクオリアが生じる**という3.10節の仮説によるならば、「リンゴ」や「神経細胞」は<わたし>という主観世界の側に属する、ということになります。客観世界である<世界>は分子や原子といったミクロ構造の側に一步押しやられた、という形になります。

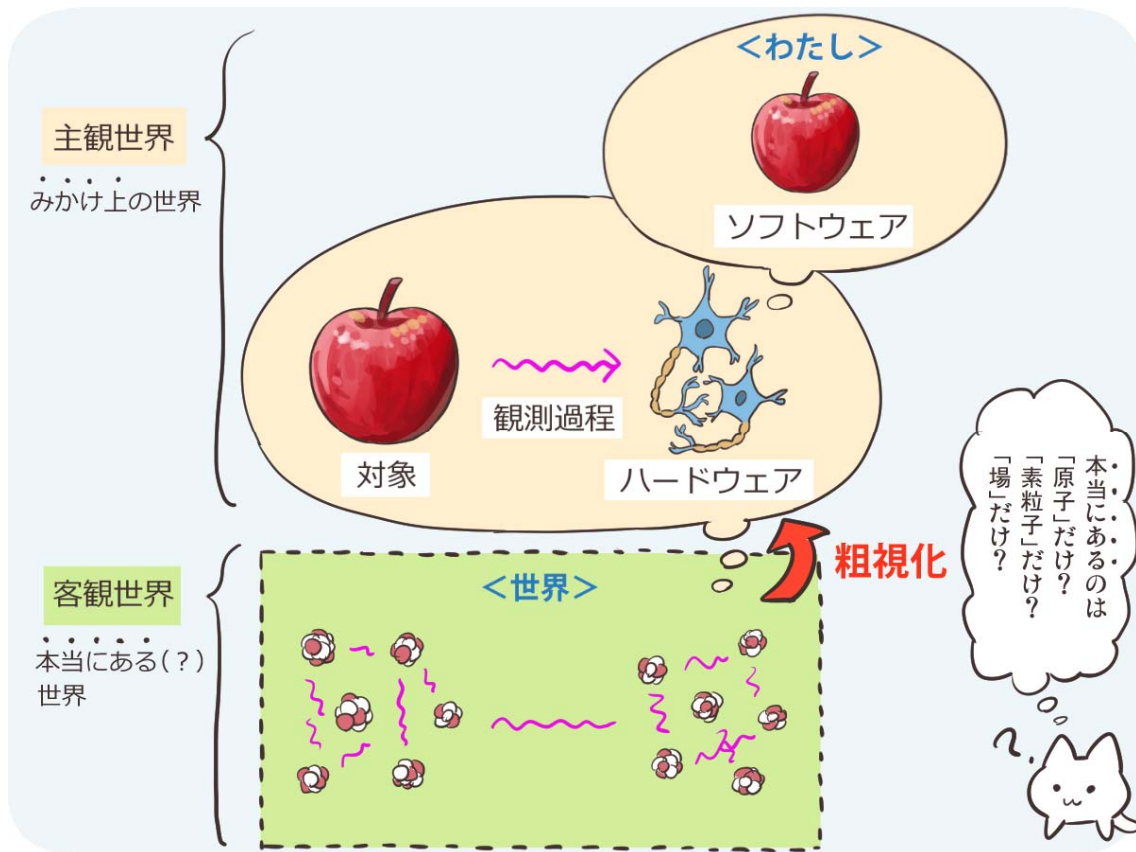


図 <わたし>と<世界>の統一 その2

もちろん、これだけでは当然終わりません。

さらにそうして考えてみると、第2章のはじめでやったように、分子や原子といった構造もまた、やはりよりミクロな構造である核子、さらにはクォークといった素粒子へと還元されていくことになるはずです。

そうしてひたすら突き詰めていくと、最終的には、<世界>はヒモの振動だのグラフだのエンタングルメントされた量子ビットのネットワークだのと、何らかの「万物の法則」へと還元されることになるはずです。

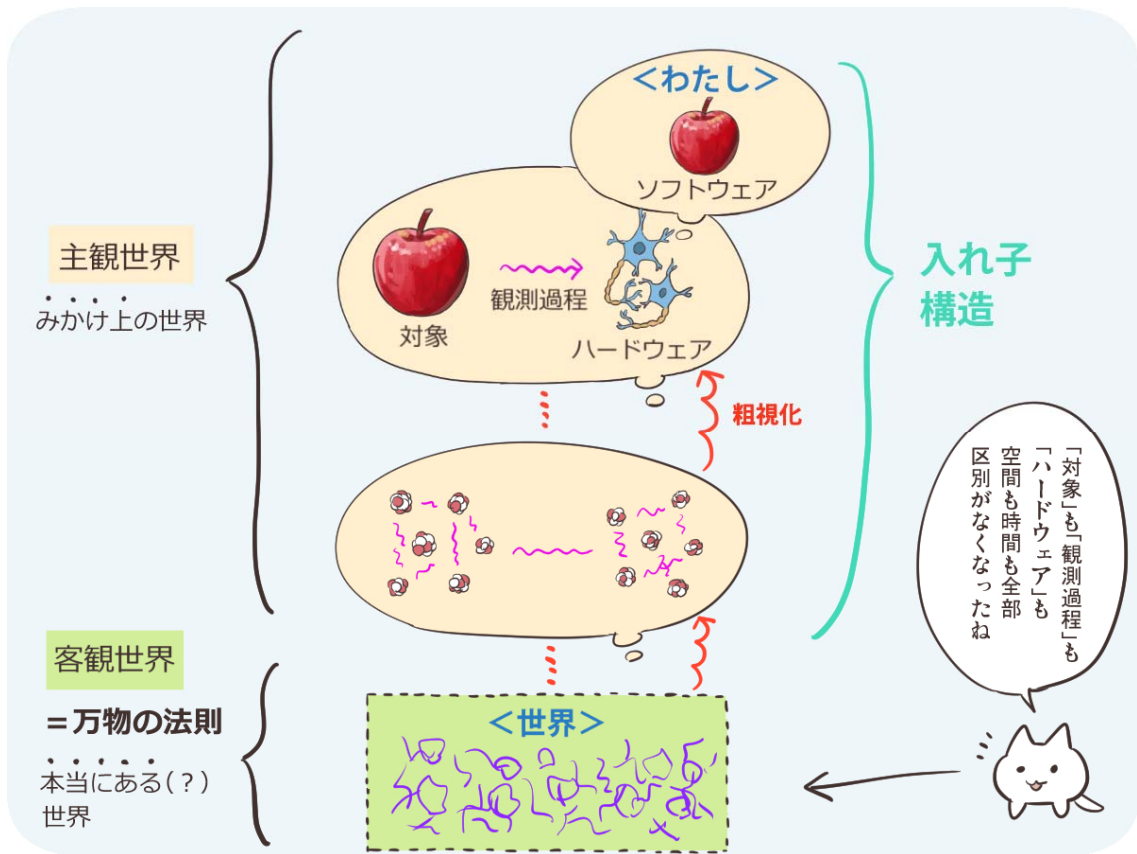


図 <わたし>と<世界>の統一 その3

ここでまず注目すべき点は、「万物の法則」においては物質も電磁波も力も空間も、すべて統一されると考えられることです。

すなわち、万物の法則の視点において、「対象」「観測過程」「ハードウェア」という区別は消失し、3つは統合されます。あるのはただ「ヒモの振動」のようなグチャグチャなものだけです。

また、主観世界の側をみると、かつて<世界>の側にあった核子、原子、分子、等々といったパターンが「粗視化の粗視化の粗視化の……」といった具合に**入れ子状に連なって**<わたし>まで繋がっていることがわかってと思います。

ところで、この構造は（ここまで読んできた方であれば）既視感があるはずです。

すなわち、3.11節で考えた、脳内で最終的に<わたし>を生じさせるまでのクオリアの入れ子構造とやっけることが同じなのです⁴¹。

そのように考えてみても、やはり「原子、分子、細胞、……」等々といった粗視化された構造はすべて、<わたし>を生じさせる枠組みのアナロジーとして統一的に理解ができるように思います。

さて、では<世界>の側として今や唯一残された場である「万物の法則」というパターンは、客観世界として盤石なものなののでしょうか？

もちろん、そうでないことは第2章からずっと言ってきた通りです。そのような物理法則世界は<すべて>という一切が不確定の海から<わたし>による人間原理的要請として、パターンとして<選択>されたものです。

ということで、「万物の法則世界」もまた、結局は<わたし>という主観世界の側に属することになります。

⁴¹ そう考えるなら、例えば顕微鏡や加速器を使って物質を分子や原子といったマイクロな構造に解体していくことは、瞑想によって<わたし>という意識を単位クオリアに分割することと、やっていることが同じ、ということになると思います。

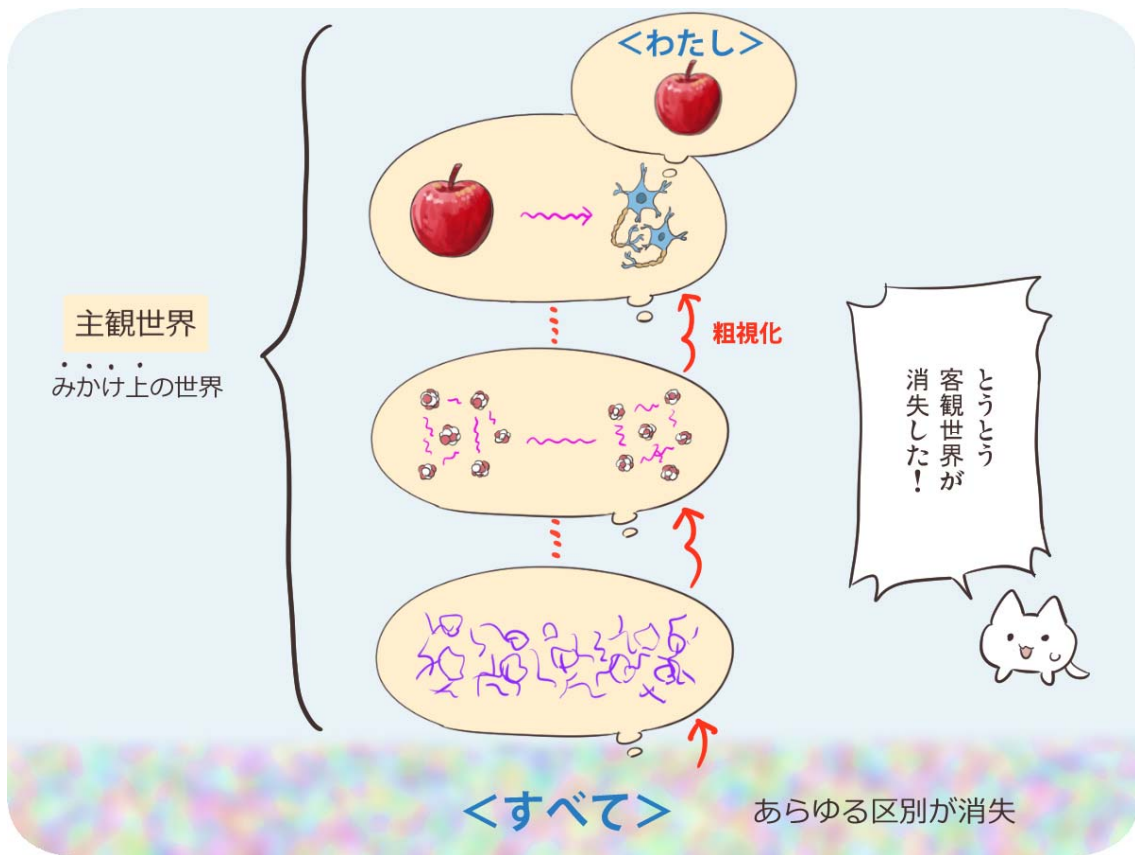


図 <わたし>と<世界>の統一 その4

とうとう客観世界としての<世界>が消滅してしまいました⁴²。

すなわち、ここにきて<世界>という概念を<わたし>という枠組みで統一できたこととなります。

つまり、第四部の目的を達することができました。

⁴² ポエム的な表現を使うなら、客観的世界とはタマネギのようなもので、その本質を探ろうとひたすら粗視化という皮を剥いていくと、結局その中心にはあるのは<すべて>という「非存在」だけ。ということです。仏教的な「空」の思想のようなものです。

ただ、そうは言ってもこれでは<世界>という言葉がいらなくなってしまうし、<わたし>という言葉が何を指しているのかもわかりにくくなってしまうので、あらためて、用語を再定義して整理したいと思います。

<すべて>から続く粗視化の入れ子の連鎖の終着点を<わたし>とし、<わたし>を除く残りの入れ子構造をまとめて<世界>と呼ぶことにします。

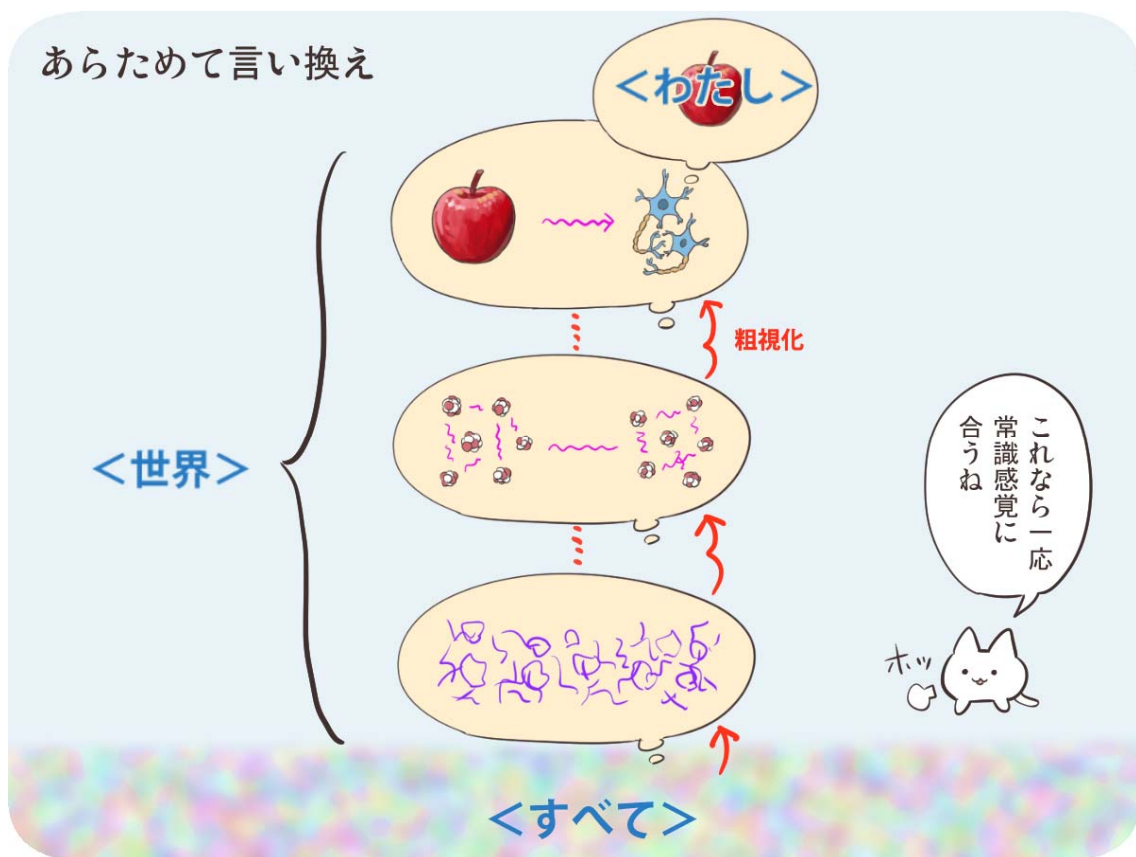


図 <わたし>と<世界>の統一 その5

そうすると、<わたし>や<世界>という言葉に対応するものが一般的な意味での「主観世界」や「客観世界」と合致するので、常識的にわかりやすいと思います。

さて、第2章から言ってきたように、<世界>は「<わたし>の成立」という人間原理的要請によって成立しているのです。また同時に、<わたし>は「<世界>の成立」によってのみ、成立することができます。これは「卵が先か鶏が先か」のような双方向的な因果関係です。

これが何を意味しているかというと、<世界>というパターン群は<わたし>という観測者によって<すべて>が粗視化されることで初めて成立し、また同時に、<わたし>という観測者が成立するためには<世界>というパターン群が人間原理的に要請される、ということです。

すなわち、「『素粒子』が粗視化された『核子』が粗視化された『原子』が粗視化された『分子』が粗視化された……」というように<すべて>から<わたし>に向かって「粗視化」の連鎖が起こると同様に、「『<わたし>』を成立させるための『神経細胞』を成立させるための『分子』を成立させるための『原子』を成立させるための……」といったように、<わたし>から<すべて>に向かって「人間原理的要請」の連鎖が起こっていると考えられる、ということです。

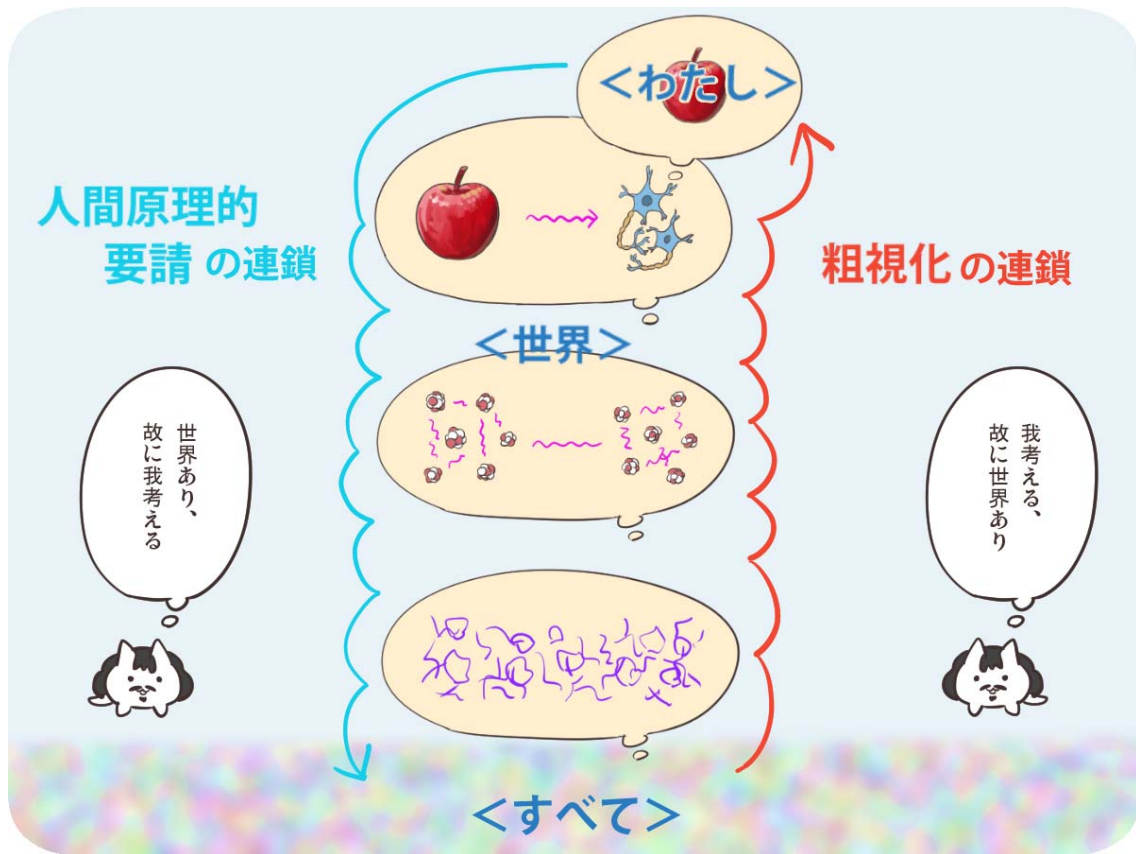


図 <わたし>と<世界>の統一 その6

ここで若干比喩的な表現ではありますが、物語を作るときも、シナリオありきでキャラクターをそれに従わせるようなやり方ではキャラクターが死んでしまいますし、逆にキャラクターに好き勝手にやらせたらシナリオが成立しません。なのでお話を作るときには、「シナリオ」というトップダウン的な方向と「キャラクターの勝手な動き」というボトムアップ的な方向、この両者が最もうまくかみ合う最適解を探ることになります。

同様にして、この<世界>は上部構造からの人間原理的な要請というトップダウン的な方向と、下部構造からの粗視化というボトムアップ的な方向の両者がうまく噛み合った最適解として選ばれている、と考えられるように思います。

さて、ここで、因果関係の連鎖は双方向的に起こっているのですが、連鎖の片方の根っここの<すべて>は永遠不動です。よってもう片方の根っこである<わたし>こそが、この構造の根本原因となります。

よって、根本原因である<わたし>が消滅することで、両者の連鎖は**芋づる式**に失われ、結局<世界>というパターンは<すべて>という一切が不確定の海へと埋没して意味を成さなくなってしまう、ということになります。

すなわち、第2章の最後に結論した通りです。

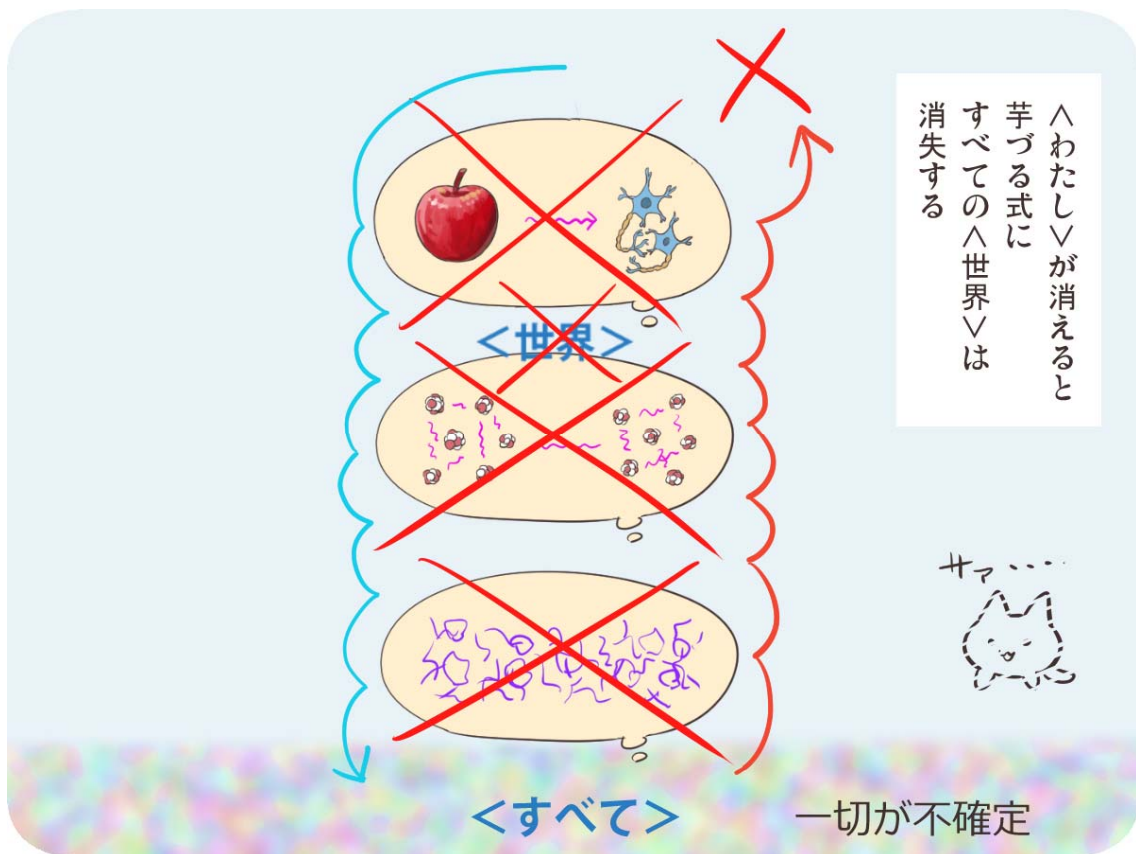


図 <わたし>と<世界>の統一 その7

このように、<わたし>と<世界>はやはり、一蓮托生の存在であると考えられます。

以上でおおよそ説明はついたのでないかと思えます。

次章にて、第四部の結論をまとめたいと思えます。

4.3 万物の真理 まとめ

前節までの議論より、〈わたし〉と〈世界〉を統一する見方を提示し、それらの成立理由についても理解できたと考えます。

よって、第四部の最初に予告した通り、「万物の真理」を以下の様に提示したいと思います。

万物の真理：

〈すべて〉⁴³。そしてそれを内側から自己原因的に⁴⁴、入れ子状に粗視化する無数の内部構造⁴⁵が存在し得る⁴⁶。それらの集まりは〈すべて〉そのものである。

以上が、「いったいこれは何なのか？」に対する私なりの解答であり、この作品世界の住人たちがたどり着いた究極の真理です。

⁴³ 〈すべて〉自体は存在ではないので、「〈すべて〉がある」という言い方はできません。だから単に、「〈すべて〉。」と体言止めして表現しています。

⁴⁴ すなわち粗視化して創発されたものである原子とか分子とか神経細胞とかそれ自身が粗視化を行っている主体である〈わたし〉を作りだしている、という自己原因性です。

⁴⁵ もちろん内部構造とは〈わたし〉と〈世界〉のことを意味します。

⁴⁶ 存在は「〈わたし〉にとって」としてしか意味を成さないのです。だから外側から「存在」に言及するとき、それは「し得る」という可能性以上のものではないこととなります。

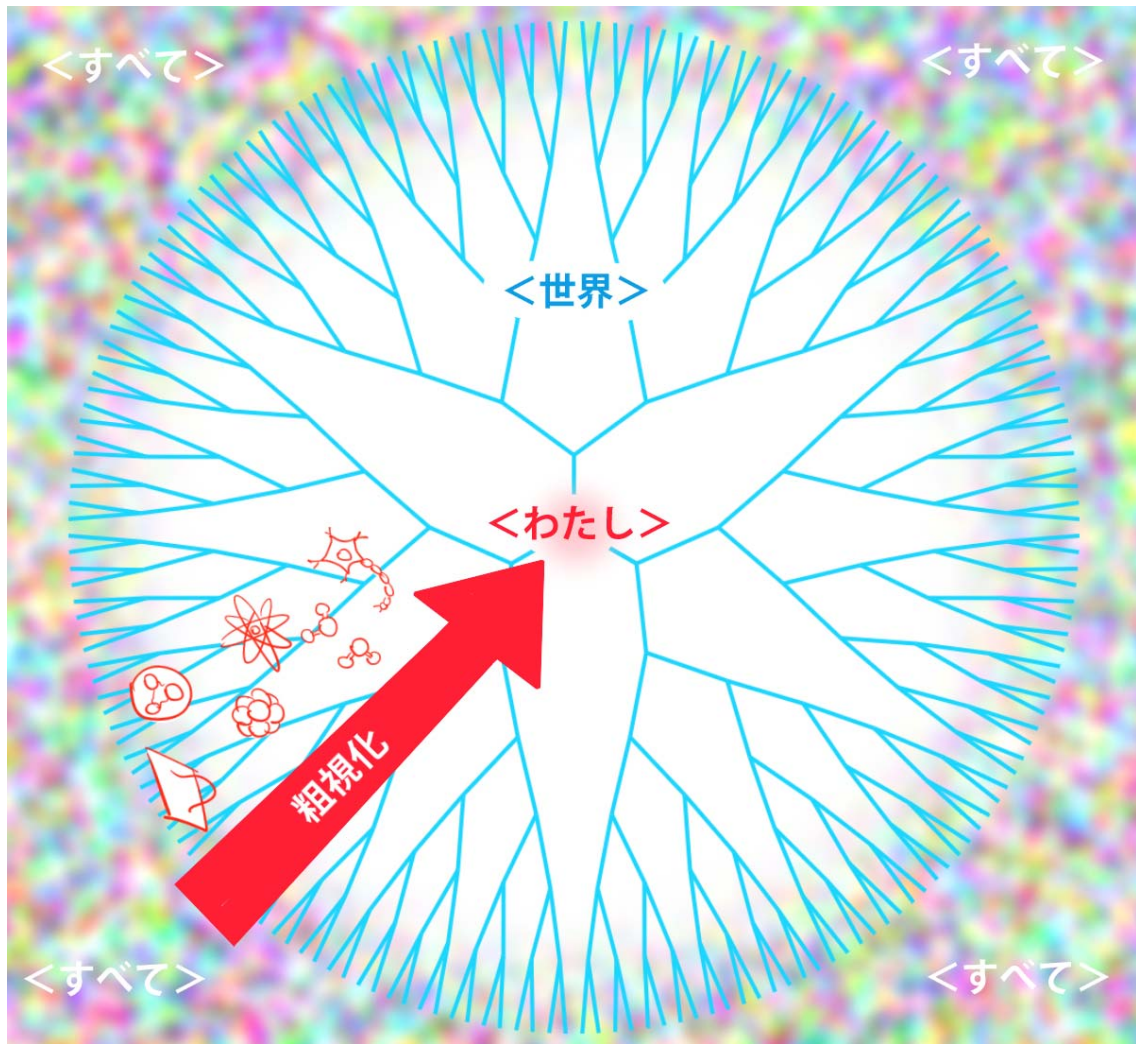


図 「万物の真理」 概念図

長々とおつきあいいただきありがとうございました。第2章、第3章、第4章の議論によって、「なぜ何もないのではなく何かがあるのか」「何かがあるとはどういうことか」「なぜこの世界はなんらかの自然法則に従っているように見えるのか」「なぜ私はこの私なのか」「私とは何か」「死んだ後はどうなるのか」、「意識やクオリアはどのようにして生じているのか」、「主観世界と客観世界はどのように統合されるか」、等々の疑問に対して、おそらく考え得る限り最も恣意性がなくシンプルな仮定である〈すべて〉というモデルを用いて、統一的に納得のいく説明ができたのではないかと思います（もしかしたら納得できているのは私だけかもしれませんが。。）

そして、ここまでの話を前提として、最後の章にうつりたいと思います。